米国における児童文学の動向

田中久子

子どものパーソナリティの発達に与える本の影響が重大に考えられていることは、米国においても日本におけると同様である。が、子どものためによい作品をつくり出すということが一応の段階に達し、読書の材料に不足しない最近は「児童文学は如何にあるべきか」を論じるよりむしろ「如何にして子どもに本を読ませるか」ということが児童文学に関する大きな課題となってきている。

生活全体がめまぐるしい速度で回転し、強烈な刺戟にあふれる社会の中に生き、本よりももっと簡単にたのしめて、ダイヤルをまわすだけで選択を変えられるラジオ、テレビが普及した今日では、子どもに読書のたのしみを教え、これを一生の宝として持たせるということが非常に難しくなってきている。その結果として児童文学それ自身についての研究より、それに付随する研究、即ち、適当な本をえらぶという選択に関する研究とか、児童心理学に基いた読書指導に関する研究が数多く見られる。

ヨーロッパでは、子どものための本は四百年位以前からあったと言われる。しかしこれは子どもに教訓を与えるためにおとなの立場から書かれた本であり、子ども自身のために、また子どもをたのしませる目的で本ができたのはせいぜい二百年位以前、現在のように子どもの立場からものをみ、子どものためにのみ書いた本ができるようになってからはやっと百年になるかならない位である。一八〇〇年以前には、児童のための本は文学としては扱われず、また扱われる場合にもはるかに下位におかれ、子どもの本を書く作家はおとなものの作家より劣るものとされていた。したがって、匿名または偽名を用いて書く場合が多く、作家自身も子どものものを書くことを片手間の仕事と考え、往々にして、末だ世に認められない作家がおとなものへの習作として書いていた時代が長くつづいたのである。

やがて心理学が発達し、子どもに関する考え方も変化した。そして子どものための文学に熱心に努力する人々の力で次第に児童文学の地位が上り、現在では子どものためにのみ書くすぐれた作家や画家によってつくられた本が多く出版されている。少なく見積っても五十社位にのぼる出版社が児童文学部をもち、児童もののみを専門とする編集者をおいている。そして百社に近い出版社が少なくとも年に一冊、社によっては二十冊近い本を世に出している。米国で一九四九年に出版された児童むきの本は九七九冊であって、そのうち八四六冊が新版、一三三が以前からあった話をまとめたものであったが、現在では毎シーズン千冊以上の本が出版されている状態である。その結果、美しい、おもしろい本が溢れるようにはなったがそれに応じて子どもた

ちの読書熱が高まったかとゆうと、残念ながら誠に不振な状態であるとしか言えない。

子どもに本をよませるためには、手のとどくところに、本をゆたかにおかなければならない。そこで、学校はもちろん、公立の図書館は特別の部屋を設け、子ども達を招きよせるために美しく飾り、あれやこれやと手をつくし、専門の図書司をおいて相手をつとめ、貸出しをうける資格や手続きも至って寛大にしている。また、巡回して歩く図書自動車もかなり広い部分を児童ものにさいている。図書館活動はよくゆきとどいていてよく訓練された有能な図書司が児童文学の第一線にめざましく活動している。すぐれた作品の出ることを奨励して、一九二二年にニューベリー賞が制定され、毎年すぐれた作品が児童図書館員の手でえらばれ今日までひきつづいている。

この読書への招待役にあたる人々のために次にあげるような教育機関が毎シーズンの推薦図書のリストを発表している。

-The National Council of Teachers of English

-The Association for Childhood Education International

-The Joint Committee of the National Education Association

-The American Library Association

教育関係（特に言語教育関係）の月刊誌には必ずと言ってもよい位「子どもの本案内欄」が設けられている。最近の Childhood Education 誌（Journal of the Association for Childhood Education International）は Freeing Children to Read（六一年十一月号）や Living with Books（六二年三月号）と銘打って「子ども達と読書」を一冊の編集テーマとしているくらいである。

子どもの読書については、古くはターマンの「子どもの読書」（一九三一年）に児童心理学的考察として書かれているが、子どもの読書に関する興味についての研究は一九〇〇年――一九二〇年には年に一つ位しかなかった。現在では二百をこえる研究が発表され、美しい、魅力ある本をつくるばかりでなく、子ども達の心理を研究することにより子ども達を読書へたぐりよせようとする気構えを示している。これらの研究の綜合的結果ともいうべきことは次のことで、これは児童教育のすべての分野にあてはまる根本原理と完全に一致している。

第一に、子どもはどの子どもも「スペシャル」な子どもなので、マスメソッドの指導はできない。即ち読書指導は必ず個人的であるべきである。子どもは各々生活環境、生活経験が異なり、成長度が異なり、興味がちがうのであるから、一冊の本を与えるべき時期という点からのみ見ても一人ひとりちがうのだ、だから時期をあやまった良い助言は、悪い助言と同じ位とりかえしのつかない悪い結果を招くほどであるとさえ言われている。子どもの読書指導に関する一般論はないわけではないが、何よりも個人差に充分の考慮が払われるべきであるというのが結論となっている。

児童文学の対象となる児童の年令は研究者により多少の差はあるが、三才から十六才までが入っている。最近は十台の終りのいわば高校生小説とも言うべきものが多く出ているが児童文学とはややよびにくいようなものもある。

子どもの読書に対する興味の傾向は一応年令で分けられているが、幼児に関するものを次にあげてみよう。

三才位――見てたのしむもの。全員が一場

面で、何かまとまった意味をもつもの。

四才位――たいして意味のないごろ合せのよいことば、ごく短い、二、三頁で一つのまとまった話となっているもの。

五才位――動物が話をしたり、マザーグースのように節をつけて言えるもの、絵を見ながら字をよむもの。

したがって幼児によいものというのは、この興味の傾向に沿い、入学後の学習につながるリーディング・レディネスをつけるようなものである。幼児に本を見る喜びと興味を支え、想像力をまし、観察力をつけ、本を通じて社会生活への関心を持たせ、自分の社会的立場を意識させるものということになってくる。幼児及び低学年のものは、自分で読むものも、読んでもらうものも、口調のよい、リズム感のあるものがよいとされている。

これらの研究を通じて強く打ち出されていることは、よい読書の習慣をつけるのに最も適した時期は九才前後とされていることである。この時期には、肉体的、精神的にも成長し、かなりの長さの読書に耐え得るし、学校で読書の技術も身につき、男女の性別による興味の傾向もはっきり現れ出し、何よりよいことには「ロケットについて知りたい」とか、「探偵ものを読みたい」とか、自主的な目的と興味をもって読書し得る段階に達していることである。このあとにつづく、十二、三才の多読時代への準備として、九才前後の指導は大切と考えられている。そしてこの時代から十二、三才時代には、何でもよいからとにかく「読む」ということに先ず力を入れ、それから内容と程度をあげるように指導するのがよいとされている。

ここで当然問題となってくるのが漫画本である。児童もので五千部を売るのはたいへんだが漫画本で一カ月に千五百万部以上も売れているものがかなりある。漫画本に対する賛否両論は全く日本と同じである。

反対論――色彩・印刷・紙質の低劣、文法的誤りが多い、汚いことば、犯罪に対する態度の悪さ。センセーショナルな事件を一人の超人的人物が非合法的に解決し、それをよしとすること。

賛成論――とにかく本に興味を持つ。ユーモアを養う、低廉である、読んでもらうより読む方がおもしろいので自分で積極的に読む。

最近はテレビの功罪論の方が華々しくなり、漫画本は以前ほど問題としてとりあげられなくなった。その上、漫画本に関する研究によると高校一年生時代から興味が激減してくるので、成長過程の一時期とも考えられ、絶対反対というよりむしろ読書への門として、漫画本のよいものを育てようとするようになってきている。

では児童文学に関してどんなものがのぞましいものと考えられているのだろうか。

真の意味でのすぐれた文学はおとなにも子どもにもよいものであるべきだが、子どもは人生における経験も浅く、読書力も劣るので、子どもの成長度に合わないものはどんなすぐれた文学でも不適当である。この意味でおとなのためにかかれた本の中で、子どもも読んでおもしろいというのは真の意味の児童文学ではあり得ない。しかし、立派な児童文学は同時におとなのためのものでもあり得るわけである。

特に児童文学に好ましい点としてあげられているのは大体次のようなものである。

アクション――子どもの理解の範囲内であって、ドラマティックで動きの早いもの。

ヒューマニティ――自分のまわりにあるも

のを理解し、同情し、正しい寛容な社会的態度をつくるのに役立つ。

イマジネーション――子どもにとって、空想の世界は殆んど現実とも言える位であるから、子どもをたのしませ想像力を養うために。

正義感――子どものもつこの性質に訴え、それを育て、子どもが真と美を求めて人生を健全に、正しく生きるために。

ユーモア――子どもはおもしろいことが好きである。余り微妙な判りにくいユーモアでなく、はっきりした、理解し易いもの。

サスペンスと期待――これによって子どもの興味をつなぎとめ、本を手放しがたくするもの。

親近感と新奇さ――子どもは自分のよく知っていることについて読むのが好きであると同時に、新奇なものに非常な興味を示す。

教訓めいてないもの――自分で本をえらぶ年令に達した子どもは教訓めいたものはどんなにおもしろい本でも興味がない。

ことばと文体の美しさ――正しい、美しいことばと適確な表現を持つ文。余り長文はよくない。挿絵は美術的で美しくありたく、また機械のように正確さを要する挿絵は完全に正確であるべきこと。

内容以外に関する問題としては、装丁がしっかりしていて、印刷が鮮明で、色彩その他すべてが美的感覚を養うようなものであること。字体や字の大きさも成長度に応じたものであるべきで、余りに小さすぎるのは、もちろん、よくないが、余りに大きすぎても、目の動きの早さが頭の理解の早さに追いつかず、まどろこしくて興味を失わせる原因となることもある。

以上のべたように、子どものための本は百花乱山咲くが如くくりひろげられているが、その園に来てあそぶ蝶の少なさというのが現在の児童文学の状態ではなかろうか。蝶のむれ集う花園にするには、蝶の生態を知るのが肝心である。現代の子どもは現代のおとなの子ども時代とは全くちがった生き方をしている。興味もちがうし、用いることばさえもちがう。彼らにとっては、テレビジョンのない時代は、プレヒストリック時代とも考えられるほどであろう。文字を通してものを知り、考える時代に育ったおとなは、文章でものの形を考え、心に描くことができるようになっている。この時代には文字は極めて重要で、その演じる役は大きくこれなくしては知的には全く盲も同然であった。ところが現代の子どもは、実際の形や事件の経過を目で見ることで知り、音は文字を通さずたちまち耳に伝わるという伝達形式になれてしまっている。また、おとなと一しょに同じプログラムをみることによりおとなの世界への入りこみ方も早く深く、ダイヤルをまわすことで、すばやく自分の気に入らないものを消し去り、気に入ったもののみを受け入れるという選択の自由にも馴れてしまっている。

子ども達をとりまく社会及び生活の変化と、それからおこる子ども達自身の変化を思うと、今日に生きる子ども達が一九五〇年時代の子ども達と同じ期待をもって本にむかうということは到底あり得ないことである。

児童文学は、この変化した子どもをよく理解し、現代の子どもの要求に応え、子どもにぴったりしたものをつくり出して子どもの心を捕えると同時に、子ども達の幸せを願うおとな達の心をも子ども達へ通わせ得る方向へ進んでほしいものと希望してやまない。

（三島学園大学）